

研究余滴 宇都宮士龍と『延年集』

高橋, 昌彦
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10429>

出版情報 : 文献探究. 20, pp.59-62, 1987-09-26. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

宇都宮士龍と『延年集』

高橋昌彦

近世中期、殊に京阪の漢詩人たちの交流の中で、宇都宮士龍の名を見る事は、屢々である。そして、その中でも、特に名を残す事になったのは、三原妙正寺の寄題詩を当時の文人たちより集めたところにあると言える。頼春水『師友志』に、

宇都宮潭、字士龍、稱龍藏、備後三原士人、自刀筆小吏累遷、至掌郡務、為人端亮淳深、有器局、言辭安定不苟、舉動必由規矩、而有風趣、嗜騷雅、納交都會名士、三原妙正寺景勝殊絶、士龍為之四方寄題、一時名家詩集、必有其詩、其勝大著、士龍之力也、然皆為其君謀、非自為也、余跋寄題詩卷、亦詳言此事、

と記述があるのは、決して誇大な表現ではない。「寄題三原妙正寺」(『増補三原志稿』・『備後叢書』五・『三原市史』四に翻刻、原本は今も三原妙正寺が所蔵)の顔触れが、混沌社や賜杖堂に連なる面々である事からも、事実と頷けよう。また、江村北海は、『授業編』卷之九において、

備後三原ノ。宇都宮龍藏ハ。勳厚ノ士ナリ。嘗テ三原妙正寺ノ題詩。且記文ヲ求ム。其地理ヲ細カニ圖シ。外に繪圖ヲ二枚ソエタリ。一枚ハ。妙正寺ヨリ海上ヲ望ム景。一枚ハ海上ヨリ妙正寺ヲ望ム圖ニシテ。丁寧ヲ悉セリ。カ、ルホドニ。居ナガラ其勝概手ニトル如ク。ナマナカ其地ヲ経テ。アラマシニ目撃シタルニハ。反ツテハルカニ愈レリ。サレバ是等ノ事ハ。乞求ル人。其心得アルベシ。

と、「寄題詩文」の心得の例として掲げている。宇都宮士龍は、一時代には知名の士でありながら、今日忘れ去られた人物の一人と言

える。

もとより、この人物について、我々が目にする資料は少なく、人名辞書類にも、その名を探す事は出来ない。唯一、「増補三原志稿」には、

名は維潭龍藏と稱す、其先関東の名族にして後大内氏毛利氏に仕へ遂に淺野家に仕ふ、士龍に至り文学を以て名あり、天下の碩学と交り、遂に君主の命を受けて妙正寺寄題詩を蒐む、得る所頗る多し。今寺に納むるもの是れなり、天明元年十一月十五日歿す、壽徳寺に葬る。

とあり、その没年と墓所が知れる程度である―この記述を頼りに、壽徳寺を訪ねたが、士龍の墓を見つける事はできなかった。今ここに、伝を形成する程の資料もないが、士龍に関して、前記の資料に付け加えられるべき事を記してみる。

士龍と交友の深かった人物として平賀中南がいる。その伝「経学者平賀晋民先生」の巻頭写真には、「宇都宮士龍筆蹟」・「宇都宮士龍像」が載り、『日新堂集』の詩文には、数多く士龍の名が登場している。以下、同集より士龍及び士龍の家族についてわかることを記す。

○「宇都宮士龍母君松田氏七十序」(卷之七)

宝曆六年、後述する。

○「宇都宮士龍母君八十序」(卷之七)

明和三年の作。

○「宇都宮士龍六十序」(卷之七)

安永八年八月八日の作。この年、士龍が齡六十であれば、享年は六十二となる。

○「潮鳴館記」(卷之八)

士龍の居「潮鳴館」については、『葛子琴詩』・「春水

遺稿』等にも見える。子琴は安永四年、春水は同五年の作となっている。

○「田中氏行實」（卷之九）

士龍の室の行状、安永八年正月十六日没、年四十。四男三女を育てたとある。「春風館日記」（「広島県史」近世資料編viに翻刻）に登場する「三原宇都清藏」はその息子であろうか。

○「祭宇都宮士龍北堂松田氏文」（卷之九）

没年を「安永某年月日」とのみ記しているが、文中より安永五年春には既に逝っていた事が判る。

更に、江村北海『北海先生文鈔』には、

○「宇都士龍慈幃八十八歳序」（卷之上）

○「宇都友壽墓碣」（卷之中）

が見える。前者には、葛子琴に安永三年の作として「米田山歌壽宇都母八十八」（『葛子琴詩』）がある。後者は、士龍の父の墓誌であるが、宇都宮氏の家系について類い知ることが出来る。友壽は、元文元年十二月五日、五十五歳で没しており、士龍は、三男の仲子であったことがわかる。

又、「日本詩選」作者姓名は、

宇士龍、備後三原人、俗称龍藏、仕本府、動慎而有吏才、登庸當路、職事執筆、而不曉文雅。

と、能吏にして、且つ、文雅を愛するを述べ、「日本詩史」卷之五は、

三原。雖在備後。入藝侯封内。山海環抱。殊覺形勝。頗有好詩者芥彦章。往遊其地。尋余遊巖島。彦章貽書三原諸子。為余西道主人宇士龍。安子桓。川則之。敬待最至。三子好詩。士龍最錚錚矣。

と、その詩才を評している。その詩才故に、また、当時の多くの騷人墨客との交流も成し得たのであろう。そして、官吏としての能力、詩才と共に、もう一つ士龍には、孝行という評価が加わる。「日本詩選続編」卷之五に採られた士龍「家慈八十壽詞」の割注には、

世之稱士龍者、或稱純孝、或稱精忠、此詩祝母氏延壽、遂及君侯遐算、足為左券、士龍已純孝矣、是以母氏享年垂九十、已精忠矣、是以頻年超進、竟職當路、加之天資好學、又能雅尚韻事、加士龍余無間然。

と、手放しの讃辞が附されている。事実、先にいくつか引いたように、当時の詩人達の詩集に、士龍の母の寿詩を散見することが出来る。

そして、その寿詩のうち、母七十を祝った一書が『延年集』として世に出ているのである。

四六版。三十四頁。宇都宮士龍輯、同七五校。発行者宇都宮七五。昭和十一年一月十二日発行。

だが、今までに、この本を引いた論等を目にした事はなく、ここで少しく触れてみたいと思う。例言において、宇都宮七五は、

此集我祖宇都宮士龍「初稱生田後復本姓」所輯者也。先考宇都宮常松與胞弟花井卓藏共欲刊行之。未果而相尋逝矣。今茲值先考之壽年忌。紹其志以付剞劂焉云。

とこの本の刊行について記す。所謂饅頭本である。順次、構成をみていくならば、最初に「延年集序」として、「寶曆丁丑（七年）之春 越前 清絢撰」と、清田儼叟の序が載る。次に、編者士龍の文。この書の性格をみる上で引いてみる。

寶曆丙子（六年）春二月六日家母七十誕辰也。適以三日設筵上壽。此有所承而則然。於是親族故舊廣酒釀來以作慶祝。近郷交遊及社中諸君來賀以詩若文。而吾 世子廬山君。特垂大惠撰壽

草。命侍臣吾友新濟美恩賜之。實希世之賜也。適平安芥丹丘先生為壽序並壽詩。併與諸君子詩見遠贈。潭也不堪慶躍。併先諸作以奉庭聞。跪而誦詠之則又皆粲然圭璋光彩交映清響互發。誠足榮寵母氏矣。潭之庸劣輒辱承大賜不亦榮幸乎。蓋保壽延齡人生至樂。而況著之文字搢之歌詠以滿于江湖傳于千載乎。聊輯錄以當南山篇。遂名以延年。

寶曆丙子五月望

生田潭拜稽首書

賀宴の日時や様子、芥川丹邱との深交の程が窺い知れる。

本文に入ると、寄せられた詩序が、三原世子廬山公を筆頭に続く。その数は、序が三、七言絶句が三十七、七言律詩が五、五言律詩が二、四言詩一で、作者は四十二名を数える。勿論、その中には、先に掲げた平賀中南の序も「生田母松田大孺七十序」として入集している。うち、いくつかを引いてみる。

壽序一篇敬賀三原田士龍令堂七秩初度

平安 芥丹丘先生

余客歲遊於山陽。客於三原三旬。三原人士與余深交者為田士龍。士龍朝夕從余遊。余亦一訪其舍謁士龍母氏。母氏年雖高有壯容。喜余至設鷄黍待接送迎惟謹。後余辭三原歸京。士龍及諸子遠送郊外。士龍臨別告余曰潭母氏明年七十矣。潭小吏家貧又無妻妾侍養。一母一子零丁無恃。幸逢七秩將祝初度之辰。願無侑酒之辭。願先生歸京後幸賜雄文實希世之賜也。余曰吾子所請敢忽之哉。既歸京奔走世故惟日不給延及今春。春風融燕居窟中。忽想田生母氏初度因將撰侑酒之辭。竊謂凡世之所貴三。德一齒一爵一。夫德與齒天爵也。公侯卿太夫人爵也。而有天爵然後能保人爵。苟無天爵則無保人爵。故今世公侯地方千里富埒秦楚徒有人爵。驕奢僭逼上違霸王之法。一朝爵奪地削國滅家絕者比比可數矣。此其為公侯之母者安則患危存則懼亡。不若為士庶有天爵者

之母乎。士龍吏士也。而篤實謹行最長武藝兼嗜學術精通經義又善文章。此庶幾有天爵者哉。故母氏有安泰之樂無危懼之患。故齡滿七秩步履安健視聽不衰。此其壽兆所以踰於有人爵者也。士龍以此語詳告母氏。母氏必其晚爾微笑焉。因撰侑酒之辭曰。櫻山我親。永年不崩。有松偃蓋。流膏維凝。餐斯靈液。壽考克登。天祚孝子。景福是膺。龜算鶴齒。相比無稱。

先に、『日本詩史』を引き、丹邱が三原を訪れた事が記してあったが、この文により、宝暦五年であることが判る。また、「延年集序」を撰した備叟は、その中で、「以士龍請業芥君彦章乃今介而徵余言。余於彦章尋兄弟誼。不可辭也因書。」と、丹邱を介して寄せたことを述べている。

題王母園賀三原田士龍令堂七十

平安 河子龍

彩霞春鎖瓊華臺。千歲蟠桃正開。日暖瑶池王母降。

玉龍遙賀五雲來。

神童と言われた河野想齋の詩。安永八年、三十七歳で没した想齋、宝暦六年は十四歳であった。尚、この詩は「延年集」巻頭に写真として掲載されている。

寄賀宇士龍生母氏七十華誕

西肥 大潮

王母蟠桃又著花。翩翩青鳥舞仙家。聞今容色如而立。

七十人間轉自誇。

送士龍宇都君兼壽其太夫人

浪華 葛子琴

揚帆豈為憶鱸魚。知子中情在倚闌。游洛銀笙來彩鳳。渡江寶劍映紅蓑。還家兒戲衣無改。奕世君恩髮有餘。多暇園庭御輿日。三原秋興定紛如。

と、今日、名を残す人々の詩が寄せられている。また、土龍の文中にもあったが、社中の人物として、川口西洲や安井子桓等六人の名が見える。平賀中南は、「官務之暇。與二三同志。嘯咏於其中。」（「潮鳴館記」）と社中の様子に触れている。三都は、固より、宝暦年間において、詩社が地方に形成されていた事は、既に指摘される所であるが、その一つに、三原という地を加えることが出来るよう。

詩文の流行の中で、土龍のような一地方の文雅の士を見ていくことは、当時の地方と都市との関わり、その中を活動した文人たちを追いつける上で、大切な事である。そして、これまで紹介されることのなかった『延年集』は、そんな文人たちの交流の一端を垣間見させてくれる一書と言えよう。

最後に、『延年集』の作者名を本文の順番通りに載せる。氏名の下の注は、同書にそのまま附されてあるものである。

- 平安 芥丹丘先生〔名煥字彦章〕
- 豊前 石伯卿〔名正恒號麟洲小倉儒臣〕
- 平安 芥龍氏〔名清丹丘先生長子十三歳〕
- 平安 河子龍〔岡龍洲先生長子十四歳〕
- 平安 田氏〔名玠號華陽〕
- 平安 御厨氏〔名景恒號晚翠〕
- 平安 御厨了英〔名景華號西岳〕
- 平安 木文炳〔名虎〕
- 平安 篠子昌〔名繁〕
- 平安 左達聰〔名士詢〕
- 丹後 僧子鳳
- 越後 田氏〔名瑾〕
- 浪華 宮氏〔名欣〕
- 參河 菅氏〔名蔚〕
- 浪華 江田子潮〔名泰信號如練〕
- 安岐 新濟美〔名正誠〕
- 安岐 秋氏〔名正方號蘭渚〕

- 安岐 惠美三伯〔名貞榮〕
- 安岐 土子亮〔名叔明號中南〕
- 松永 村子鑑〔名朗〕
- 玉浦 近藤子圭〔名璋〕
- 僧 竹灣〔名淵住海南玉壺山〕
- 僧 雲華〔名省〕
- 僧 遊外〔名秀泰〕
- 僧 若棠〔名載昭〕
- 社中 澤士範〔名鑑〕
- 社中 安子桓〔名武〕
- 社中 永孝幹〔名貞卿〕
- 社中 永孝欽〔名明卿〕
- 社中 澤千里〔名超〕
- 社中 川則之〔名圖〕
- 生田 平一〔名元衡〕
- 生田 潭
- 平安 豬蘭夫〔名國香〕
- 唐 子潛
- 田 氏〔名勝秀〕
- 安岐 僧處中〔名周契號寬岡道人〕
- 平安 大神子一〔名景貫〕
- 西肥 大潮〔任〕
- 浪華 葛子琴〔名張〕
- 支那 大成

以上

（注）引用に際して、適宜、字体を改めたり、句読点等を施したりした。

附記 本稿を成すにあたり、三原市妙正寺、善徳寺の方々に御世話になりました。深く御礼申し上げます。

九州大学大学院修士課程